随筆

長 朔男・榊原洋子・古道紀美子 選

知事賞

花の顔

馬 淵 兼 一（野洲市）

仏花は高い。一束六百円ほどする。老母はそれを毎月、仏壇に一束、その横の法然上人の御影に一束、寺の墓に二束、墓地の墓にも同様二束供えるので、計六束を購っている。

その束になっっている仏花にはたいがい「顔」がある。花々と同じ方向に揃えられているほうが顔であり、その後頭部は茎とか葉ばかりである。

皆さん、仏花を供えられる時、花束の顔はどちらに向けるだろうか。拝んでいる人間の側に向けるのか、それとも御仏や御墓のほうに向けるか、どちらなのか。

おそらく、皆さんもわたしと同様、仏花の顔は、拝する

わたしたちのほうに向けられる筈だ。わたしたちは、御仏を見て、そして仏花を見て拝むものである。

ところがもうすぐ九十路となる母は違うのである。花束の顔を、御仏やお墓のほうに向ける。「仏さんにお花を見てもらうんやから、お花は、仏さんのほうに向けて供えるんや」そういう思いを母は持っているようだ。

しかし、わたしの経験では、そんな供え方をしていない。墓もないし、供花の茎や葉しか見られないご家庭やお寺の仏壇をこれまで拝したことがない。それに、御仏にお念仏を捧げる時、花が反対側を向いているのはどこか奇異に感じる。

「そんな花の供え方はおかしい」と言っても、老いた母の固定観念を崩すことはできない。

だから、母が居ない時に、こっそりと供えてある花の顔をこちらに向け直す。が、またいつの間にか顔はそっぽを向く。母がいちいち花の顔の向きを元に戻しているからだ。

よくよく考えたとしても、やはり花束の顔を御仏やお墓

のほうに向ける供え方はおかしいのである。一つは、なぜお花を供えるのかということだが、それは御仏を拜する者たちが、綺麗なお花を見て心を洗い、清らかな気持ちで念仏を唱えるためではないか。もしそうならば、花の顔はこちらのほうに向いているべきで、茎や葉を見ては清まらない。

もう一つは、御仏は既にお花に囲まれた浄土にいらつしやる。そのことを示すのが、仏花の役割であり、御仏が花々と共にいらつしやることを象徴させる上では、やはり仏花もこちらを向いて微笑んでいるように咲いていくべきではないか。

母の仏花の供え方は間違っている——わたしはそう考え、耳が遠いこともあり母に大声で諭すのであるが、花の顔は常に仏様のほうに向けられる。

ところが、親戚の法事に出かけた時、供花に対するわたしの考えを反転させることがあった。

立派なお寺の中で法事が執り行われた。その大きな仏壇を見た時、わたしは驚いた。それはまた色とりどりの大束の花々が、なんと、どれも阿弥陀如来像のほうを向いているのだ。色彩のまことに豊かな花の顔は凡て御仏に向いている。

これはどうしたことか。法事が滞りなく終わり、説教のお話が済んだ後、わたしは和尚に訊いた。

「お花が、裏向いているようですが……」

和尚は、これを訊ねられるのを待っていましたとばかり満面に笑みを浮かべ答えられた。

「いやあ、そうなんですよ。おかしいと、そうお思いになられますか、やはり」

「いえ、そんなことはないのですが……」

おかしいとは思うのだが、それを母でなく和尚に面と向かって言うのは気が引けた。数珠を手にされた和尚は、一度阿弥陀如来像に手を合わされてから話を続けられた。

「じつは、先代の住職の奥様がですね、このようなお供えをされていらしたのです」

和尚は、じつは外からこのお寺に住職を引き継ぐ形で入って来られた御方であった。

「へえ、ほくの母と同じですね」

「そうですか……それはまた。それで、私も最初おかしいと思ったのですが、けど奥様からお話を聞いてすぐに思い直しました」

和尚は語ってくださいました。お花を見て心を清める人も居れば、逆に、お花を御仏に見せることによって心を安らげ

る人もいる。特にご先祖に感謝の気持ちを捧げる思いから、お花を見ていただきたくないと願うこともある。確かに、仏は散華にあるようにお花に囲まれていらっしやるが、さらに拝み申し上げるこちら側からお花を提供する、そんな気持ちでお花を仏のほうに向けたいと念ずる人もいるのではないか。

聞いていて、わたし自身がなんと狭い料簡でいたことかと恥じた。

帰宅して、仏壇の前に座ると、仏花の顔は相変わらず御仏のほうを向いていた。いつもなら、こっそりと顔の向きを直すところだが、これもこれでいい、とわたしは思い、静かに念仏をお唱え申し上げた。